問四　花子さんは、文章Bのテーマを、「いまこの瞬間の大切さ」と考え、「わたしたちの時間の使い方」という題で発表することにしました。

あなたが花子さんであったならば、どのような発表をしますか。次に示す条件に従って、発表する内容を書きなさい。

条件一　先生が配布した資料1、資料2を参考にすること。

条件二　文章は、「自分の意見」、「意見の理由または意見が正しいことのよりどころ」、「予想される反対意見とそれに対する反論」、「まとめ」の四つの部分からできていること。

ただし、クラスのみんなに、自分の意見がわかりやすく伝わるための効果的な文章の組み立てを自分なりに考えて、四つの部分の述べる順序を工夫すること。

条件三　原稿用紙を使い、原稿用紙の正しい使い方に基づいて書くこと。

条件四　文章の分量は六六〇字から八〇〇字までで書き上げること。

条件五　題名や氏名は書かず、すぐに本文から書き始めること。

さいたま市立浦和中 2008

文章B（『モモ』ミヒャエル・エンデ作　大島かおり訳　岩波書店）

「おまえは、なぞなぞは好きかね？」と、彼は歩きながらふと思いついたようにききました。
「ええ、とっても好きよ！　なにか知ってる？」
「ひとつあるんだがね。」と、マイスター・ホラはモモをにっこり見て言いました。「けれど、とてもむずかしいよ。解ける人はほとんどいないんだ。」
「すてきだわ。あたし、そのなぞなぞをおぼえておいて、あとで友だちにもやらせてみるわ。」
「おまえに答えがわかるかどうか、たのしみだな。よく聞くんだよ。
三人のきょうだいが、ひとつの家に住んでいる。
ほんとはまるでちがうきょうだいなのに、
おまえが三人を見分けようとすると、
それぞれたがいにうりふたつ。
一番うえはいまいない、これからやっとあらわれる。
二番目もいないが、こっちはもう家から出かけたあと。
三番目のちびさんだけがここにいる、
それというのも、三番目がここにいないと、
あとのふたりは、なくなってしまうから。
でもそのだいじな三番目がいられるのは、
一番目が二番目のきょうだいに変身してくれるため。
おまえが三番目をよくながめようとしても、
そこに見えるのはいつもほかのきょうだいだけ！
さあ、言ってごらん、
三人はほんとはひとりかな？
それともふたり？
それとも――だれもいない？
さあ、それぞれの名前をあてられるかな？
それができれば、三人の偉大な支配者がわかったことになる。
彼らはいっしょに、ひとつの国をおさめている――
しかも彼らこそ、その国そのもの！
その点では彼らはみなおなじ。」
マイスター・ホラはモモを見て、元気づけるようにうなずいてみせました。モモはなぞなぞをようく聞いておきましたし、とてもすばらしい記憶力を持っていたので、いまそれをゆっくりと、ひとことひとこと、くり返して言ってみました。
「うわぁ！　ほんとにすごくむずかしいわ！」と彼女はためいきをつきました。「ちっともわからない。どこから手をつけていいか、見当もつかないわ。」
「よく考えてごらん。」と、マイスター・ホラは言いました。
モモは小声で、なぞなぞをまたはじめからすっかり言いなおしてみました。そして頭をふって、白状しました。
「できないわ。」
そのままにカメがそばまで来ていました。マイスター・ホラのよこ

にすわって、モモをいっしんに見あげています。
「さて、カシオペイア、」と、マイスター・ホラが言いました。「おまえは三十分さきのことまでなんでもわかる。モモはなぞなぞを解くかな？」
「トキマス！」と、カシオペイアの甲らに文字がうかびました。
「ほら、ごらん！」マイスター・ホラはモモにむかって言いました。「おまえには解けるはずだよ。カシオペイアの予言はぜったいにはずれないから。」
モモはひたいにしわをよせて、もういちどいっしょうけんめい考えました。おなじ家に住んでる三人きょうだいって、いったいなんだろう？　人間じゃないことはたしかだ。なぞなぞでは、きょうだいとくればいつもリンゴの種とか、歯とかで、どっちにしろ、おなじ種類のもののことだもの。でもこんどの三人きょうだいってのは、おかしなぐあいにたがいに入れかわってしまうんだわ。たがいに変わりあうようなものって、なにがあるかしら？　モモはあたりを見まわしました。たとえばあそこの、炎の動かないろうそく。ろうそくだと、ろうは炎に変わり、炎は光に変わる。そうだ。これが三人のきょうだいだ。ああ、やっぱりだめか、これじゃ、三人ともいっしょにいるわ。三人はいっしょにはいないはずだもの。すると、花と、実と、種みたいなものかな。そうだわ、これだとうまく合う。種は三人のうちでいちばん小さい。そして種がここにあれば、花と実はここにないし、種がなければ、ふたつともいられない。ああ、やっぱりまずい！　種なら、ちゃんと見えるもの。だって、三番目のいちばん小さいのをながめようとすると、いつもほかのきょうだいばかり見えてくる、そういう問題だったわ。
モモはあれこれと考えまよいました。答えが見つかったと思っても、どれもすぐ行きどまりになってしまって、さきに進めないのです。でもカシオペイアの予言だと、ちゃんと答えを見つけられるはずです。そこでモモはもういちどはじめから、なぞなぞの文句をゆっくり口ずさんでみました。
「一番うえはいまいない、これからやっとあらわれる……」というところまで来たとき、モモはカメが目くばせしているのに気がつきました。その甲らに、「ソレハ　ワタシノシッテイルモノ！」という文字がうかんで、すぐまた消えました。
「だまってなさい、カシオペイア！」と、マイスター・ホラはその文字をのぞきこんだわけでもないのに、にやりとして言いました。「言ってはだめだ！　モモはひとりでやれるんだから。」
もちろんモモはカメの甲らの文字を見ていましたから、それがどういう意味なのかを考えはじめました。カシオペイアが知ってるものって、なにかしら？　あたしがなぞを解くこと？　でもそれじゃ、つじつまが合わない。なにかべつのことだとすると？　カシオペイアは、これから起こることをなんでも知っている。これから起こること……
「未来だわ！」と、モモは大声を出しました。「一番うえはいまいない、これからやっとあらわれる――これは未来だわ！」
マイスター・ホラはうなずきました。
「すると二番目は――いまはいなくて、もう出かけたあと。するとこれは過去だわ！」

マイスター・ホラはまたうなずいて、うれしそうににっこりしました。

「でも、つぎはむずかしいな。」と、モモは考えこんで言いました。「三番目はなにかしら？　三人のうちでいちばん小さい、でもこれがいないと、ほかの二人はいられない。そして、いまここにいるのは、これだけ。」

モモはしばらく考えていましたが、きゅうに大声でさけびました。

「いまのことだわ！　いまのこのときのことだわ！　過去ってのは、過ぎてしまったときのことで、未来ってのは、これから来るときのことだもの！　だから両方とも、現在がなければ、ないわけだわ。これならぴったり合う！」

モモはうれしさで、ほおがまっかにもえだしました。そしてつづけます。

「でも、そのつぎはどういうことかしら？

そのだいじな三番目がいられるのは、

一番目が二番目のきょうだいに変身してくれるため……

そうだ、つまり未来が過去に変わるからこそ、現在っていうものがあるんだわ！」

モモはマイスター・ホラのほうをおどろいたように見ました。

「これで合うわ！　こんなこと、いままでいちども考えてみたことがなかった。でも、ほんとうはいまの瞬間なんてぜんぜんなくて、あるのは過去と未来だけじゃないのかしら？　だって、たとえばこの瞬間――あたしがしゃべっているこの瞬間だって、あっというまに過去になってるもの！　あっ、そうか、わかったわ！『おまえが三番目をよくながめようとしても、そこに見えるのはいつもほかのきょうだいだけ！』っていうのの意味が。すると、そのあとのところもわかってくるわね。だって、三人のきょうだいのうち、いるのはひとりだけ、つまり現在だけだとも思えるし、そうでなくて、過去と未来のふたりだけとも思えるんですものね。それともうひとつ、三人のどれも、ほかのふたりがいなければなくなってしまうのだから、けっきょくだれもいないのとおなじだとも考えられるわけだわ！　ああ、頭がこんぐらかってしまう！」

「でも、なぞはまだのこっているよ。」と、マイスター・ホラが言いました。「三人がいっしょにおさめている国というのは？　しかも三人はその国そのものだというんだよ。」

モモはとほうにくれて彼を見ました。いったいなんだろう？　過去と現在と未来、これをみんないっしょにすると？

彼女は大きな広間を見わたしました。視線が、なん千、なん万という時計のうえをさまよいました。するととつぜん、彼女の目がパッとかがやきました。

「時間だわ！」と彼女はさけんで、両手をうちあわせました。「そうだわ、時間なんだわ！　時間よ！」

モモはうれしさのあまり、二、三回とびはねました。

「それじゃ、三人のきょうだいが住んでいる家とはなにか、その答えを言ってごらん。」と、マイスター・ホラはたたみかけました。

「この世界のことよ！」

「でかした！」と、こんどはマイスター・ホラがさけんで、手をたたきました。「すごいぞ、モモ！　なぞなぞを解くのがうまいんだね！　ほんとにうれしいよ！」

「あたしだって！」とモモはこたえました。

先生から配られた資料

【資料1】男女、行動の種類別生活時間（平成13年、18年）一週全体（時間、分）

	総数			男			女		
	平成13年	平成18年	増減	平成13年	平成18年	増減	平成13年	平成18年	増減
睡眠	7.45	7.42	−0.03	7.52	7.49	−0.03	7.38	7.35	−0.03
身の回りの用事	1.13	1.15	0.02	1.02	1.06	0.04	1.23	1.25	0.02
食事	1.38	1.39	0.01	1.36	1.36	0.00	1.41	1.42	0.01
通勤・通学	0.31	0.31	0.00	0.41	0.41	0.00	0.22	0.22	0.00
仕事	3.39	3.44	0.05	4.56	4.59	0.03	2.27	2.32	0.05
学業	0.40	0.37	−0.03	0.43	0.40	−0.03	0.37	0.35	−0.02
家事	1.25	1.27	0.02	0.13	0.17	0.04	2.34	2.34	0.00
介護・看護	0.03	0.03	0.00	0.01	0.02	0.01	0.05	0.05	0.00
育児	0.13	0.14	0.01	0.03	0.04	0.01	0.22	0.22	0.00
買い物	0.24	0.24	0.00	0.14	0.15	0.01	0.33	0.34	0.01
移動（通勤・通学を除く）	0.32	0.30	−0.02	0.32	0.29	−0.03	0.33	0.32	−0.01
テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	2.32	2.24	−0.08	2.38	2.28	−0.10	2.26	2.21	−0.05
休養・くつろぎ	1.20	1.25	0.05	1.19	1.23	0.04	1.21	1.26	0.05
学習・研究（学業以外）	0.14	0.12	−0.02	0.14	0.13	−0.01	0.13	0.12	−0.01
趣味・娯楽	0.42	0.45	0.03	0.50	0.51	0.01	0.35	0.38	0.03
スポーツ	0.13	0.15	0.02	0.16	0.19	0.03	0.10	0.11	0.01
ボランティア活動・社会参加活動	0.04	0.05	0.01	0.04	0.05	0.01	0.05	0.05	0.00
交際・付き合い	0.26	0.22	−0.04	0.25	0.20	−0.05	0.27	0.24	−0.03
受診・療養	0.08	0.09	0.01	0.07	0.07	0.00	0.10	0.10	0.00
その他	0.16	0.16	0.00	0.14	0.14	0.00	0.18	0.17	−0.01

（総務省統計局「社会生活基本調査」より）

【資料2】5月一ケ月間に読んだ本の数（単位＝冊）

西暦	元号	小学生	中学生	高校生
2004	平成16年	7.7	3.3	1.8
2003	平成15年	8.0	2.8	1.3
2002	平成14年	7.5	2.5	1.5
2001	平成13年	6.2	2.2	1.1
1994	平成６年	6.7	1.7	1.3
1984	昭和59年	7.4	2.1	1.6
1974	昭和49年	4.3	2.1	1.8

5月一ケ月間の読書０冊（さつ）（不読者）（単位＝%）

西暦	元号	小学生	中学生	高校生
2004	平成16年	7	19	43
2003	平成15年	9	32	57
2002	平成14年	9	33	56
2001	平成13年	11	44	67
1994	平成６年	18	50	63
1984	昭和59年	9	43	50
1974	昭和49年	13	35	36

（全国学校図書館協議会「第50回読書調査」より）